

多様な自然環境と地域資源で育む里山共生都市 けん引役は《いちばんづくり》

多様な資源に恵まれた 地域の環が結ぶ里山共生都市

中国地方のほぼ中央部、広島県の北東部に位置する庄原市は、市域の北側が島根県と鳥取県、東側が岡山県に接する《県境のまち》だ。市域が3県と境を成す地勢は希少な事例と言えるが、その要因は、庄原市の置かれた地理的な位置付けと市域の広大さにある。

東西約53km、南北約42kmに及ぶ市域は総面積1247km²。県都・広島市は47都道府県庁所在地の上位5番目に当たる広大な面積(907km²)を有するが、庄原市は広島市の約1.4倍。その広大さは全国1741市区町村の中で13番目、町村を除けば10番目。近畿以西の都市に限定すれば、最大の面積を誇る自治体なのだ。

庄原市域は、主に緩やかな起伏の台地(標高150~200m)で形成され、可住地面積・

耕地面積を除く市域の約84%が、山岳地や中山間地をはじめとする森林地帯(1047km²)だ。さらに、島根県・鳥取県との県境を成す北部地域、1200m級の山岳地帯と周辺のエリアは、豪雪地帯にも指定されている。

市域の多くを山岳地や中山間地など森林地帯に占められているにもかかわらず、庄原市の耕地面積(約69.3km²)は広島県で最大級だ。庄原市の基幹産業は農林業が担ってきた。林業については昭和30年代以降、植林が盛んで、森林地帯を外れる耕地では、米・野菜・花卉・果樹などの農作物の他、和牛・乳牛・豚・鶏の飼養など畜産業も盛んだ。

とりわけ庄原市は、国の地理的表示(GI)保護制度にも登録(令和元/2019年、和牛肉としては中四国地方で初)されたブランド牛《比婆牛》の発祥地・産地として名高い。

全国の中山間地域と同様、高齢化や担い手不足などから林家数や農家数は減少を続ける

きやまこうぞう
木山耕三
庄原市長

が、庄原市は今も広島県の総農家数の8%以上を維持するなど、農業を支える存在であり続けている。

庄原市の多様な地勢を形成し、基幹産業の農林業を支えるのは、豊かな水資源だ。市域内の山岳部は長大な分水嶺を成しており、中国地方を代表する河川・江の川水系(日本海側に注ぐ)と、高梁川水系(瀬戸内海に注ぐ)の大小の河川が、広い市域を縦横に走り、豊かな水脈を張り巡らしている。



日本の原風景を感じさせる里山風景（比和町／つなぐ棚田遺産認定：比和三河内の棚田）



春らんまん!! 上野公園（東本町）の桜並木は「さくら名所100選」にも選定の名勝

そうした特質は一方において、中国地方を襲った「平成30年7月豪雨」の際の事例のように、庄原市に多大な被害をもたらす災害要因

になりかねない特徴とも言える。だが、こうした自然環境の大枠を見ただけでも、「第2期庄原市長期総合計画」に掲げる市の将来像の通り、庄原市は市街地と里山が混然一体となった、文字通りの「里山共生都市」と言うにふさわしい地域であるということが分かる。

現在の庄原市は、平成17（2005）年3月31日、旧庄原市（昭和29／1954年・市制施行）と旧比婆郡西城町、同東城町、同口和町、同高野町、同比和町、旧甲奴郡総領町との1市6町の新設合併により、新庄原市としての歩みを開始した。

全市域が過疎地にも指定されている庄原市は、全国の都市と同様、人口減少および少子化の抑制が最大の課題になっている（※庄原市エリアの人口のピークは昭和22／1947年の総計9万2240人、平成17年

の合併時の人口は4万3149人、本年1月31日現在の人口は3万2551人）。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、令和42（2060）年の庄原市の人口は1万6646人。だが庄原市では「第2期庄原市人口ビジョン」において、「第2期庄原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」による人口減少抑制効果のある施策の実践を前提に、令和42年の人口目標値を1万8000人台の維持に設定。豊富な地域資源（財産）の活用とアイデア豊富な各種施策・事業の実践による、持続可能なまちづくりへの取り組みを精力的に推進している。

「全国的に見ても広大で、多様な自然環境を持つ庄原市のまちづくりには、他の都市に



庄原市内には三つの「道の駅」が立地し、防災拠点・物流拠点・観光交流拠点としての役割を果たしている（写真は高野町《道の駅たかの》）

はない多くの特徴があります。例えば、庄原市の市街地は、基本的に中国山地の山々に囲まれた大小の河川沿いに広がる盆地や、流域の平たん地などに形成されています。そのため、市街地の連続性を図ることが非常に難しい。本庁舎を旧庄原市役所に置き、六つの旧町役場を支所として残しているのは、そうした地理的環境による必要性からです。

しかし、その半面、市民の一体感を図りながら、庄原市には多彩で独自性に満ちた地域文化が、今も各地域に息づいています。食文化をはじめとするその多様性は、観光振興などの面において、特に大きな魅力を形成しているものと自負しております」
そう語るのは、木山耕三庄原市長だ。





国名勝指定から100年。庄原市と神石高原町にまたがる「帝釈峡」は庄原市観光最大の人気スポットの一つ(写真は神龍湖)



中国地方唯一の国営公園「国営備北丘陵公園」は庄原市の四季折々の花だよりを全国に発信

儲かる循環型林業と次世代育成で 進める林業の再活性化

木山市長は大学を卒業後、広島市内の観光関連会社、合併前の故郷・旧東城町を本拠とする観光関連会社などで要職を歴任。

平成7（1995）年から3期12年間、広島県議会議員を務めた後、平成25（2013）年4月、庄原市長選に初出馬で当選。本年4月で、連続3期11年目を迎える。

木山市長が就任以来、人口減少と少子高齢化（※本年1月末の高齢化率44・1％）が進む庄原市に、地域活力を取り戻す政策の柱として常に掲げてきたスロー

ガンは「庄原いちばんづくり」だ。

「それは例えば、庄原市の何かを、数値的な部分で日本一にしたいとかいうようなことではありません。私たちの地元の方言で言えば『やっぱり、庄原がいちばんええよのお』と、市民の皆さんに心から実感していただける、そんなまちづくりをしたい。」

端的な言い方をすれば『心のいちばん』を、市民の皆さんに感じていただきたい。県議時代からいつも考えていた、私のそんな『想い』を表現したスローガンなんです。

実際、庄原市には、地域の皆さんが他の地域に対しても誇れるような、庄原がやっぱりいちばんいいなと再認識していただけるような、優れた地域資源（財産）がたくさんあります」（木山市長）

市民にとっての「心のいちばん」を目指す庄原市が、地域アイデンティティーの要として、特にその発信活動や事業展開に力を入れているのは、豊かな森林環境を活用する各種の林業振興と、庄原市（旧比婆郡）にルーツがあるブランド牛・比婆牛の普及・増産、さらには豊かな地域資源を活用した観光振興だ。

「数値的な追求は二の次とはいえ、《心のいちばん》を市民の皆さんにただ感じ取っていただくだけでなく、その結果としてはもちろん、産業振興や雇用の場の創設など、具体的な効果に何らかの形で結び付けてい



里山風景を楽しみゆったり滞在できる「せとうち古民家ステイズ」（市内3カ所に立地）の一つ、上谷町の（不老仙）

けるよう、努力を重ねています。

そうした意味合いからも、庄原市ではやはり、先人たちが築いてくださった豊かな森林資源（人工林）の産業的活用と、持続可能な環境づくり、森林資源を活用した次世代育成などが重要との観点から、令和3（2021）年3月に『22世紀の庄原の森林（もり）づくりプラン』を策定しました。このプランは『儲かる循環型林業』を骨子としていますが、その背景には平成31（2019）年4月1日施行の『森林経営管理法』に伴い、国から自治体への森林環境譲与税の交付が開始されるなど、森林を巡る社会環境が大きく変化してきているという事情がありま

す」(木山市長)

周知のように、森林環境譲与税制度は、令和元年度から開始された。市町村と都道府県に対し、国が私有林・人工林面積、林業就業者数や人口による客観的な基準で案分し、市町村による森林整備等の財源として譲与する仕組みとなっている。市町村は、例えば間伐など森林整備に関する施策・事業、人材育成や担い手の確保に関する施策・事業、木材利用の促進や普及啓発事業など、森林の整備促進に関する施策の財源に充てることができる。同時に都道府県では、森林整備を実施する市町村への支援金として使える。

「森林環境譲与税は、庄原市のような森林環境を持つ自治体には、実にありがたい制度です。庄原市としては、これを契機に策定した『22世紀の庄原の森林(もり)づくりプラン』を基盤に、『儲かる循環型林業』を体現する取り組みの第一歩として、今年(※令和4/2022年)11月1日、廿日市市に本拠を置く建材会社《株式会社ウッドワン》と立地協定を締結しました。それに基づき、ウッドワンは令和6(2024)年4月に、100%出資子会社《株式会社フォレストワン》(製材工場)を庄原市内で稼働の予定です」(木山市長)

この事業の推進を契機に、「庄原産材のブランド力向上と市場の開拓を図り、庄原産材を原材料とする各種の製品開発や、市場

への安定供給、加工体制の確立を目指したい」とする木山市長は、「各種研修会や林業研修教育の受講支援などを通じ、次代の林業を担う人材育成や市内での就業促進と共に、新たな雇用の場の創設を図り、将来的な移住・定住の促進にも役立てていきたい」と抱負を語る。

中でも注目したいのは、林業分野の次世代育成の場、地域の林業を活性化する情報発信拠点として、令和3年3月、市内・比和町に整備された「庄原市森林体験交流施設／愛称《森林(もり)の学舎(まなびや)・比和》」の存在と、そこを中心に行われている、小中学生が対象の「森林体験プログラム」だ。



「森林(もり)の学舎(まなびや)・比和」は山あいにある空き校舎を改修し整備した森林体験交流施設

令和3年度から始まった同プログラムは、既に令和4年12月までに17回実施、延べ350人の小中学生が参加している。その中には施設が立地する比和町の比和中学校1年生が、総合学習の時間にプログラムを活用した事例や、県内外のファミリー層に参加を広く呼び掛け実施した、同プログラムのモニターツアーなど、多角的な取り組みの成果も含まれている。

庄原市森林体験交流施設は旧古頃小学校の空き校舎を改修し、再活用した施設だ。改修に当たっては、平屋建てで地元産木材がふんだんに使われた建物の構造および外観を極力生かし、建物の中心部を成すオー



「桜花の郷 ラ・フォーレ庄原」は令和3年に日本郵政から取得の旧「かんぼの宿庄原」を再整備した交流宿泊施設



子どもたちに地域と林業の関わりを伝えながら次世代の育成を図る「森林学習体験プログラム」

プンスペースは天井板をあえて張らず、梁柱^{りょうちゅう}など建物内の木組み構造を見せるように工夫した。

「森林の持つ機能や効果を学び、森林に対する理解を深めることで林業の担い手を育成し、地域の林業を再活性化させることを目的に設置」(木山市長)された、まさに森林体験交流施設らしい空気感を十全に醸し出し

た施設と言える。

子どもたちはこの施設を拠点に、林業体験、木工体験、まき割り体験、伐採の見学、樹木や森の健康診断など、多彩な森林学習を、施設や周囲の森林なども活用しながら、体験的に学んでいる。

比婆牛の普及など各種の地域資源を生かしたまちづくり

林業の再活性化と並び、庄原市で近年、精力的に全国発信されているのが、ブランド和牛肉・比婆牛の普及・増産に関連する話題だ。農林水産省が定める「地理的表示



地理的表示 (GI) 保護制度に登録のブランド和牛肉「比婆牛」(写真は比婆牛となる素牛／令和4年広島県共進会・畜産の部にて)

(GI) 保護制度」に登録されている和牛肉は、松阪牛や米沢牛など全国に10例のみ。制度登録された他の産地牛と同様、比婆牛の販売には、庄原市長名で発行する「比婆牛認定証」が必要となる。

これを契機に、比婆牛は世界中から注目を集める「和牛」の一角を占めるブランド牛としての価値を改めて認められたわけだが、今後最大の課題は、市場への安定供給を実現するための各種取り組みだ。

「江戸時代から品種改良が続けられてきた比婆牛は、畜産の世界では古くから、和牛の四大ルーツの一つとして知られてきました。市内・七塚町に現在立地し、和牛資



和牛のオリンピックとされる「第12回全国和牛能力共進会」特別区に参加した県立庄原実業高校の「さらしば号」

料館の役割も果たす《広島県立総合技術研究所畜産技術センター》の前身は、明治33(1900)年に設立された日本初の《国立種牛牧場》です。この施設の存在からも、和牛産地としての庄原への信頼の高さがうかがえます。

しかし、比婆牛は地元のみでの繁殖・育成の伝統を守ってきたことから、『至高の和牛』とたたえられる半面、育成頭数が他のブランド産地に比べて少ないという難がありました。庄原市ではGI登録を契機に、厳格な品種・品質の管理を順守しつつ、比婆牛のブランド牛としての価値をさらに高め、市場への安定供給の期待にも添えるよ

庄原市

(広島県)

市 政 ル ポ



秘境を走るローカル線として根強い人気を誇るJR芸備線（広島～備後落合～備中神代）

う、官民を挙げた努力を重ねていきたい。そのための生産基盤づくりの支援を充実させ、ひいては、繁殖農家・肥育農家の所得向上にも結び付けていきたいと考えています」（木山市長）

庄原ブランドの食材としては、広大な耕地で生産される庄原のブランド米（里山の夢など）も、各種のコンクールで入賞するなど、その味と質は全国的な定評を得ている。

庄原市では今後、さらに比婆牛や庄原米を中心に『食の宝庫・庄原』を広くPRし、地域への経済効果を導きたいとしているが、その推進エンジン役を果たすのは、『庄原DMO』だ。

庄原DMOは観光産業の再生に向け、民間企業や関連団体などの共同参画の下、旧庄原市観光協会を改組する形で、令和2年に発足した。それ以後、地域資源を活用した斬新な旅行プログラムの構築や、オンラインショップによる物販強化、さらには、地域活性化事業を市民との協働で積極的に実践するなど、多角的な取り組みが光る。

鉄道ファンから根強い人気を誇るJR芸備線・木次線を舞台にした旅行企画、振興

イベントなども、庄原DMOが中心になって精力的に取り組まれている。

人口減少の数値的な推移だけを見ると、庄原市は「過疎が進みつつあるまち」のイメージが強まるかもしれない。だが、これまで見てきたように、林業の再活性化や比婆牛の全国発信をはじめ、現在進行形の個性的な活性化施策が、多角的かつ精力的に推進されている。

例えばその成果の一つとして、庄原市ではUターンやIターンによる移住・定住、そうした人々による市内起業の事例が、近年目立って増えてきている。コロナ禍以降は、県内外の企業によるサテライトオフィスの進出や、ワーケーション需要も増加中だ。

「豊かな自然環境や、市内三つの道の駅の

との言葉を、進出企業の方たちからはいただいています」（木山市長）

庄原市ではこうした声に応えるべく、企業のお試し勤務を支援するため、総領地域と比和地域に「お試しオフィス」を整備している。

経済的な活性化や安心・安全なまちづくりなどと同時並行して、木山市長の就任以降、「心のいちばん」を市民に実感してもらうべく始まった「庄原いちばんづくり」の施策・事業。現在では、行政のけん引による当初の取り組みから、産学官民が自発的な総力体制で取り組む、協働・協創型の「庄原いちばんづくり」「持続可能なまちづくり」へと、急速に進化しつつあるようだ。

（取材：文＝遠藤隆／取材日＝令和4年12月22日）

存在、広島市などと直結する充実した高速道路網、市内全域に整備された超高速光通信網、県立広島大学が立地する文教的な環境の充実など、従業員の生活の場を兼ねたサテライトオフィスの進出先としては理想的



全国からのサテライトオフィスの需要に応えるべく庄原市が整備した「お試しオフィス／吾妻ロッジ36」



令和2年に整備したJR芸備線・備後庄原駅舎「庄原市交通交流施設」は鉄道駅・バスセンターの機能を併せ持つ交通の結節点